

シンガポール現地小学校との交流から見る教育事情の違い

前シンガポール日本人学校小学部クレメンティ校 教諭
兵庫県明石市立錦浦小学校 教諭 野田 星 奈

キーワード：異文化理解、国際理解教育、現地校との学校交流、教育観の違い、多民族国家

1. はじめに

日本人学校での勤務は、私にとって長い間持ち続けた夢の1つであり、これまでにないかけがえのない素晴らしい経験となった。また、日本でも取り組んでいた国際理解教育を実践するだけでなく、学校交流の担当としてシンガポールでの現地校担当者より良い交流の在り方について話し合いの時間をたくさん共にすることができた。これらの貴重な経験を紹介したい。

2. 現地校との学校交流の概要

シンガポールの日本人学校には小学部と中学部があり、小学部は本校であるクレメンティ校（以下クレメンティ校を「クレ校」とする）とチャング校の2校ある。クレ校では、国際理解教育の一環として、地元小学校との学校交流に取り組んでいる。1・2・3年生がチーフター小学校、4・5年生がヘンリーパーク小学校と互いの学校を訪問し合い、6年生が修学旅行先であるインドネシアのバリ島の小学校で文化交流などを行っている。また、4・5・6年生の希望者は、ヘンリーパーク小学校と1泊2日のホームステイプログラムも互いに行っている。日本国内において経験することが難しい外国との学校交流。また、シンガポールは多民族国家として、中国、マレー、インドをルーツとする民族が共存している世界でも珍しい文化圏である。島国である日本の子どもたちにとって、そのような多種多様な文化と国民性を学ぶ良い機会であり、現地校の教育を知ることは私にとっても今後の教育活動において多くの良い学びとなると考える。

3. シンガポールの教育事情

(1) シンガポールの国家戦略として掲げている「教育」

PISA（Programme for International Student Assessment：国際学習到達度調査）では、参加65ヶ国中シンガポールが第3位、日本は第5位となっている。また、近年では、世界の大学ランキングにおいて、NUS（National University of Singapore：シンガポール国立大学）が東京大学をもしのぎ、アジアで1位を獲得している。

(2) 学校教育

公立学校は、小学校6年制、中学校4年生、高等学校2年制である。母語と英語を中核とする2言語教育で、義務教育以前の保育園や幼稚園から基礎教育が始まる。

公用語である、中国語・マレー語・タミール語のいずれかを「母語」として入学時に選択が可能。世界情勢において中国語の重要性から、多民族も中国語を選択する場合も増えつつある。

完全な学区制ではないため、小学校の時点で国内の全学校に選抜を経て進学が可能のため、日本に比べて教育熱は高いと言えるかもしれない。

(3) ヘンリーパーク小学校への入学方法と進学事情

シンガポールにおいてもっとも学力が高く、NUSなど、有名大学への進学率の高いヘンリーパーク小学校へ入学することは、将来を約束されたと考える保護者も多く、シンガポール国内において入学激戦区である。実際に、ヘンリーパーク小学校の保護者に話を聞く機会があった。入学に関しては、保護者がまず学校にて数年間のボランティア活動を行い、その活動の内容によって受験する権利が得られる。そのため、必然で保護者が教育熱心になり、また、保護者自身の人間性や進学歴などの学力レベルも関係してくる。このように、ハイレベル小学校へ

の入学はとても困難である。また、日本では卒業大学のランクが入社試験やその後の人生に大きく影響するに比べ、シンガポールではどの小学校に入るかで大学進学にも大きく影響し、小学校入学段階ですでにその人生の大半が決まってくるということである。

ヘンリーパーク小学校へ入学すること自体が、シンガポール人のステータス・誉となるようであり、卒業生の多くは政界・財界において活躍し、多くの著名人を輩出している。保護者がヘンリーパーク小学校の卒業生ということが、合格の条件としてもっとも優位なことであるという事実がまた驚きであった。名門校卒業が代々受け継がれているという仕組みになっている。

4. チーフター小学校との学校交流

(1) 教育理念等

①展望：An Achieving School With A Caring Environment

深い愛情と共に成し遂げている学校

②標語：Strive To Excel

優れているように努める

(2) チーフター小学校児童来校

①クレ校の英会話力

日本国内に比べ教育水準が少し高く、海外生活が長い、もしくは、海外転校経験児童がいる。日本国内と違い、中国語・英語を話すことができる児童が数名在籍しているのが特徴と言える。しかしながら、週3回の英会話の授業があるにもかかわらず、多くの児童は英語で日常会話ができるまでに至っていないのが現状である。当日は、英会話初級クラスのE1の児童も、中級レベルのE10前後の友だちの助けを借り、たくさんジェスチャーも使いながら一生懸命英会話にチャレンジした。

②交流内容

日本文化で子どもの健やかなる成長を願う「子どもの日」を扱ったプログラムを組み、「子どもの日」の紹介を英語と日本語で行った。そのため、各学級で自己紹介などの簡単な日常会話について、何度も練習を繰り返した。チーフター小学校の児童と共に将来の夢について語り合い、将来の夢を書いた鯉のぼりのうろこを作り、互いに助け合いながら一緒に飾り付けを行った。

ウェルカムソングとして日本文化の「鯉のぼり」を披露し、フェアウェルソングとしてシンガポールの国民歌“One people, one nation, one Singapore”を共に歌った。「鯉のぼり」は不思議そうに聞き入っていたが、最後の曲はシンガポールの国民性を象徴する歌であるため、本校とチーフター小学校の児童全員で手を繋ぎ、両校共に笑顔で一緒に高らかに歌い上げた。私はこの歌が大好きで、いつもサビのフレーズで涙が出そうになる。私個人の見解であるが、シンガポールが「中国・マレー・インド」の3民族であると共に、日本は「大和・琉球・アイヌ」の3民族が共存する国であると考えている。それぞれにおいて、「言語・衣装・音楽・習慣」など、独自の文化を有する民族であると考えている。ともすれば、大和文化を中心とする単一民族と思いがちな日本であるが、その個々の大切な文化を尊重し合いながら共に暮らしていければと日々感じている。

以下、その曲の歌詞を紹介する。

“One people, one nation, one Singapore”

We've built a nation with our hands

The toil of people from a dozen lands

Strangers when we first began, now we're Singaporean

Let's reach out for Singapore, join our hands forevermore

Chorus:

One people, one nation, one Singapore
That's the way that we will be forevermore
Every creed and every race, has it's role and has it's place
One people, one nation, one Singapore

And when the time comes for the test
Our vigilance will never rest
We'll be united, hand in hand
We'll show the world just where we stand
And reach out for Singapore, join our hands forevermore

(Repeat Chorus x 2)

One people, one nation, one Singapore

③来校交流を終えて

リーダー性を重視する国民性から、多くが積極的な人柄であるシンガポール国民。しかしながら、チーフター小学校の児童にとって多くの日本人と接する機会が初めてのためか、交流会の前半は消極的であった。協力してうろこを作成するあたりから徐々に緊張がほぐれ、両校間で会話が弾み始めた。クラフトの共同作成は、英会話を使わずにジェスチャーのみで交流することができる。しかし、うろこに「将来の夢」と設定したため、互いの夢について知る必要があり、会話をしなければならない。この様に、会話を必要とするプログラム設定は、消極的な日本の児童にとって良い企画であったと思う。

クレ校の児童の夢を書いた鯉のぼりをチーフター小学校へプレゼントし、チーフター小学校の鯉のぼりをクレ校の各教室に飾った。その鯉のぼりを見ることで、交流を終えた後もペアの友だちや関わったクラスの友だちへの関心が高まり、交流への意欲を継続させることに役立った。そのため、「3年生でもまた会いたい」という気持ちをもつことができたと考える。

(3) チーフター小学校へ訪問

①交流内容

交流活動として、ブースに分かれていくつかの民族遊びを共に行った。体を使った対戦型のため、会話がなくても互いに笑顔で交流することができた。

大画面の映像と共に、全員でエクササイズダンスを行う。これは、チーフター小学校独自のダンスで、体育や音楽の時間などに取り組んでいる表現活動の一環である。シンガポール国内の学校では当たり前前の学習プログラムである。これも学校交流と関連性は分からないが現地校での通常授業を疑似体験できた。日本国内の学校では、児童は1年に1回運動会でのマスケムでしか踊る機会はなく、学年が上がるにつれ踊ることに対して躊躇し始める児童が多い。このように、人前で全身を使って自分を表現する機会がほとんどなく、どんどん消極的になっているのが現状である。たのため、シンガポールの小学校のように、6年間を通して表現活動を行うことは、今後世界で活躍する可能性が高く日本経済を担うクレ校の児童にとって、また、日本国内の一般の児童にとっても必要ではないかと考える。

②訪問交流を終えて

クレ校に招待した時に比べ、チーフター小学校の児童がリラックスしており、自分らしさがうかがえた。エ

クササイズダンスなど、日本とは違った学校の様子を経験できた。遊びは会話がなくとも交流でき、すぐに打ち解けられる良い題材であった。しかしながら、ゲーム中に会話はあまり行っていないため、ゲームの後に会話を楽しむ姿はほとんど見られなかった。

遊びの内容は、昨年の3年生での学校交流と同じであり、各学年の工夫は一切見られなかった。日本の学校では、総合学習という教科があるため交流活動などは重視され、内容も検討に検討を重ねるのが常である。それに比べ、強豪国ともビジネスや学術で競い合える教育熱心なシンガポールでは、数学と科学を重視した教育カリキュラムである。そのためか、国際交流において興味関心が高いとは言い難い。

5. まとめ

上記で述べたように、日本の教育課程を取り入れている日本人学校であるクレ校において、総合的学習である現地校との学校交流は大切にしたい学習活動である。

日本の学校ではあまり重視されていないリーダー性であるが、チーフター小学校もヘンリーパーク小学校も学校目標に掲げ、あらゆる場でその可能性を磨くシステムが整っている。

クレ校の児童は、駐在の方の子息がほとんどである。中には、両親がクレ校在籍・卒業した経験を持ち、親子で日本人学校出身である児童もいる。日本の一般的な児童に比べ、クレ校の児童は両親と同じく将来世界で活躍する可能性が高いと言える。

しかしながら、自ら考えたり、自分の意見をもったりすることが苦手であり、また、それを表現することが得意とは言えない消極的な日本人。「その他大勢」や「みんなと同じ」であることが美徳であることが多い日本人社会。単純な返答の「Yes or No」でさえ、自分の意思を出すことに戸惑いを感じる。しかしながら、海外において自らの考えをもつことは当たり前であり、自分らしさを表現することは普通である。そうしなければ、ビジネスや学術の場において存在することさえ危ういのではないのかと考える。

また、英会話もしかり。東京都と同じぐらいの面積でありながらも、世界で活躍するシンガポールの人々。そこには、小学校の段階からリーダー性を重視した教育だけでなく、英語と中国語を母国語として流暢に扱うことも大いに影響しているのではないだろうか。海外にて特に感じるが、韓国もやはり英語力が高く、年々国際社会での位置づけが日本より高くなっているとさえ感じる。

児童は、一人ひとり様々な可能性をもっている。クレ校の児童の中から、政界・財界・教育界・科学・ビジネスなど、様々な分野で将来活躍する人物が現れると考える。その基礎となるリーダー性・英語力・国際性を養うには、私たち日本人学校の役割は大きいと考える。

これらの学校交流で得た、シンガポールの教育事情と国民性などの良さを取り入れ、日本人の国民性や文化も大切にしながら、子どもたちの可能性を伸ばすように尽力していきたい。

また、この2年間の経験を帰国後の日本の子どもたちに生かしていきたいと考える。